

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K02423

研究課題名(和文) スイスの疾風怒濤と美学的共和主義に関する総合的研究

研究課題名(英文) Sturm und Drang in Switzerland and the aesthetic republicanism

研究代表者

今村 武 (Imamura, Takeshi)

東京理科大学・理工学部教養・教授

研究者番号：60385531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ近代文学の嚆矢とも言えるシュトゥルム・ウント・ドラングは「ドイツ特有の現象」として語ることが多かった。しかしその源流は18世紀の幕開けとほぼ同時に開始されたスイス派、スイス・チューリヒにおけるボードマーとブライティンガーの文学活動に遡り、またそれなくしては「ドイツにおける」新たな文学理論、シェイクスピアの翻訳とその創造的受容も成立し得なかったことを本研究は立証した。文学的共和主義とという新たな文学構想はチューリヒで成立し、ドイツへ伝播したのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

一般にドイツ文学というカテゴリーで江湖に親しまれている文学は、18世紀のスイス、チューリヒでボードマーとブライティンガーが開始した文学改革に源流を持つ。それは美学的共和主義とも呼べる基本的な芸術における傾向を明確に定義して、それを実践しようとする営みであった。さらに彼らの弟子にあたる第二世代の活躍によりゲーテをも含むドイツの詩人との交流はさらに活発化し、文学のみならず絵画や音楽の分野においても革新的な傾向の作品を生み出す契機となった。

研究成果の概要(英文)：The origin of Sturm und Drang goes back to the literary and aesthetic work of Bodmer and Breitinger in Zurich. The extremely modern basic direction of literature, which can be called literary republicanism, was designed in Zurich in the 18th century and was also received and developed in Germany.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：美学的共和主義 シュトゥルム・ウント・ドラング 自然概念 想像力 チューリヒ 愛国主義運動  
18世紀

## 1. 研究開始当初の背景

一般にドイツ文学というカテゴリーで江湖に親しまれている近代から現代に至る中で生み出されたドイツの文学は、18世紀のスイス・チューリヒにおける文学革新にその源を遡る。この仮説を証明するために本研究は開始された。

研究開始当初は、立場により諸説あるのは当然とはいえ、ドイツ語圏スイスの文学はいわゆる「ドイツ文学史」において一つの傍流的な地位に甘んじていたことは否めない。スイス文学史はヨーロッパ文学研究においても「本流」とは言い難い地位にあったと言えるであろう。

チューリヒにおいてボードマーとプライティンガーが開始した執筆活動、それに伴う文学的美沢的な革新は、ほぼ18世紀を通じて行われた。チューリヒの文学が目指し、また基盤とするものは美学的共和主義と名付けることができ、この基本的傾向は、その後芸術分野全般に影響を及ぼすことになった。以上の仮説を証明するために本研究は起草され実行された。

## 2. 研究の目的

ドイツ語圏スイスの文学は、18世紀以降アルプスの自然を牧歌に詠うことで、その存在を認知され始めた。他方スイスは18世紀に入ると、汎ヨーロッパ的な規模で拡大する啓蒙の中心地・発信地となる。それは美学・文学の分野で観察すると、18世紀中葉以降に顕在化する「反抗・革命」の文学、「政治的共和制」を標榜する文学の故郷となる。スイス・チューリヒから拡大する啓蒙のネットワークを通じて、「美学的共和主義」という新しい芸術的見地が浸透、拡大するのである。このような新しい芸術観誕生のプロセスの一部は、チューリヒとライプツィヒの間で起こる「文学論争」として知られていた。

この文学論争が実は、芸術全般に観察される革新的作品群の成立の一部をなすことを証明することが必要であると本研究は指摘する。さらにチューリヒ文学の影響力を挙証するために、ボードマーらのチューリヒ第1世代の弟子にあたる第2世代の活躍を精査する必要がある。この次世代の芸術家、思想家は、ゲーテをも含むドイツの詩人との交流を活発化させ、文学のみならず絵画や音楽の分野においても革新的な傾向の作品を生み出す契機をもたらしたのである。

本研究は、網羅的研究がほとんど見られないこの問題領域を対象とする。また研究資源と時間も限りがあるために、以下の三つの分野に焦点を絞り遂行された。

(1) ドイツに先行して現れるスイスのシュトゥルム・ウント・ドラング文学の誕生プロセスとその基本的傾向を、第1次文献を対象に文献学的研究から詳らかにする。

(2) スイスから始まりドイツを貫き、イギリスにまで至る啓蒙思想を伝播するネットワークの経路を、チューリヒの第1世代、第2世代を中心に描き出す。

(3) フランス語圏のスイスから発信される新たな美学的文学的構想がドイツ近代文学誕生に及ぼした影響を精査する。

以上3つの観点から、そのヨーロッパ的規模における影響関係を個々の作品に即して例証し、18世紀スイス・ドイツ語圏文学の再検討と新たな定義を行なった。

## 3. 研究の方法

本研究は、各年度における時間軸と方法をリンクさせて遂行させる方法を採用した。

(1) 4月～7月：本研究の成果を公開するための研究書の詳細目次を作成。この作業は、本研究計画の進捗状況、ならびに年度毎に新たに得られた知見を再検討、整理して、適宜調整するための業務でもある。各年度における研究の継続的な PDCA サイクルを保障しようとするものである。

(2) 8月～9月：スイスおよびドイツにおける資料調査。とりわけ本邦においてはアクセスの難しいスイス文学の第1次資料を直接閲覧して精査することを主たる研究の方法とした。

この時間と労力を要する文献学的アプローチは本研究の根幹を成し、例年継続的に遂行した。また美術関連の資料は直接観察、検討する必要があるため、現地における研究滞在が必須となった。

(3) 8月～9月 / 2月～3月：海外研究者との連携に特に留意し、本研究計画に対するアドバース、意見交換に注力した。18世紀ドイツ文学研究の泰斗であるオルデンブルク大学デーリング教授、レンツ研究の第一人者レーゲンスブルク大学トメク教授らとの意見交換は、とりわけ今後の研究展開に資するところ大であった。

とりわけ帝政ロシア滞り時代に執筆されていたヤーコブ・レンツの膨大な遺稿を編纂したトメク氏は、本研究に多大の関心を寄せ、その進捗のため貴重な助言と協力を惜しまなかった。またドイツ側の研究協力者を得たことにより、ドイツのオルデンブルクおよびレーゲンスブルク大学図書館へのアクセスが確保されていたことは大きい。

(4) 10月～12月 / 1月～3月：国内外での研究成果の発表に特に重点を置いて研究を遂行した。国内外で開催されるシンポジウム・学会に積極的に参加することによって、本研究のもたらす知見の発信力を保証する。またドイツだけではなく、スイス、イギリスにおける研究者とのコンタクトを得られるよう努めた。特にスイス・チューリヒへのアクセスは可能となった。

(5) 9月～11月：とりわけ論文執筆に費やすことで、年度の成果の一部を可及的速やかに発

信することに意を用いた。研究成果は主にドイツ語論文によって発表した。

#### 4. 研究成果

ドイツ近代文学の嚆矢とも言えるシュトゥルム・ウント・ドラングは「ドイツ特有の現象」として語れることが多かった。しかしその源流は18世紀の幕開けとほぼ同時に開始されたスイス派、スイス・チューリヒにおけるボードマーとプライティンガーの文学活動に遡り、またそれなくしては「ドイツにおける」新たな文学理論、シェイクスピアの翻訳とその創造的受容も成立し得なかったことを、本研究は立証した。文学的共和主義といえる文学の極めて近代的な基本方向は、チューリヒで成立し、ドイツへ伝播したのである。

本研究計画が示し得た新たな研究上の地平は、ドイツ近代文学はチューリヒから始まるという結論であり、美学的共和主義を軸に18世紀ドイツ・ヨーロッパの文学、絵画、音楽を再検討する必要の提唱である。

本研究は、3つの領域に絞り込むことで、スイスの美学的共和主義の全体像と影響圏をつまびらかにしようと企図した。各領域における成果、および研究の遂行により浮かび上がった新たな課題、新たな研究地平を下記に簡略に記す。

(1)ドイツのシュトゥルム・ウント・ドラングに先行する「スイスの」シュトゥルム・ウント・ドラング文学の基本的傾向「美学的共和主義」は、現代にまで続くチューリヒの経済的発展と金融業の進展、それに伴う華奢を求める風潮に対する批判、自国の歴史尊重を背景として成立した。美学的共和主義を具体化する作品群は、スイス派のボードマーおよびプライティンガーの著作に理論的結晶を見る。

(2)スイスから始まりドイツを貫き、再度英国本土のロンドンにまで至る啓蒙思想伝播のネットワークの実際の経路は、チューリヒの第1世代を発信源として、ズルツァー、ラヴァーター、フュスリと続く次世代の活動を通じて構築された。この関連から特に北ドイツにおける啓蒙とスイス派との関連が新たな研究課題として浮上した。加えてフュスリの絵画における創作活動とゲーテとの関連、ゲーテとスイスの関連、特に具体的創作活動におけるスイス体験も研究すべき分野として指摘することとなった。

(3)フランス語圏のスイスから発信される新たな美学的文学的構想がドイツ近代文学誕生に及ぼした影響を精査する。特にルソーの著作の影響はドイツのシュトゥルム・ウント・ドラングの詩人の作品に顕著に認められる。またその影響は後世にまで及んでいることが確認され、個々の詩人における独自のルソー解釈と、若き詩人グループとしてのドイツのシュトゥルム・ウント・ドラングとの関連性についての研究にはなお時間を要する。

図らずも、得られた知見以上に得られたのは、新たな研究課題・研究領域であった。しかし本研究計画の成果、新たに得られた知見は10章から構成される研究書に纏め出版予定である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 今村 武	4. 巻 55
2. 論文標題 『新エロイーズ』と疾風怒濤――七七四年のゲーテとレンツのルソー受容	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 上智大学ドイツ文学論集	6. 最初と最後の頁 3-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Imamura	4. 巻 50
2. 論文標題 Wieland und seine poetische Entwicklung in der Schweiz.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences	6. 最初と最後の頁 233-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi IMAMURA	4. 巻 50
2. 論文標題 Wieland und seine poetische Entwicklung in der Schweiz.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences	6. 最初と最後の頁 233-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Imamura	4. 巻 49
2. 論文標題 Klopstock und die Zuercher Aufklaerung.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences.	6. 最初と最後の頁 343-360
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Imamura	4. 巻 48
2. 論文標題 J.M.R. Lenz' Literatursatire 'Pandaemonium Germanikum'	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 東京理科大学紀要 (教養編)	6. 最初と最後の頁 131-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Imamura	4. 巻 52
2. 論文標題 J.M.R.Lenz' 'Der neue Menoza'. Ueber die Zivilisations- und Aufklaerungskritik eines edlen Wilden	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Tokyo University of Science. Studies in Liberal Arts and Sciences.	6. 最初と最後の頁 201-212.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 『新エロイーズ』とシュトゥルム・ウント・ドラング
3. 学会等名 日本独文学会 2018年春季研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 チューリヒのシュトゥルム・ウント・ドラング
3. 学会等名 上智大学ドイツ文学会 2018年度総会・研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 スイス滞在時代のヴィーラント
3. 学会等名 日本独文学会 2017年春季研究発表会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 詩的「想像力」と政治的「共和制」ーボードマーとクロプシュトックの分岐点
3. 学会等名 日本独文学会 2016年春季研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 18世紀スイス・チューリヒの経済発展の光と影 ー共和国の危機を乗り越える文学的人間関係
3. 学会等名 日本人間関係学会第24回全国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 ボードマーの文学的共和主義と二人のフュスリ
3. 学会等名 第7回日本独文学会関東支部研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 J・M・R・レンツの文壇風刺劇『ドイツのパンダイモニオン』
3. 学会等名 日本独文学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 18世紀ドイツ語圏スイスにおける近代文学の始まりと若き詩人の「救い」
3. 学会等名 日本人間関係学会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 Takeshi Imamura
2. 発表標題 J.M.R. Lenz' 'Der neue Menoza' und das Motiv des 'edlen Wilden'.
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 今村 武
2. 発表標題 J・W・ゲーテ『スイスからの手紙 第1部』スイスのヴェルテルの自然と芸術
3. 学会等名 日本独文学会 2019年度秋季研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 今村武、内田均、川村幸夫、佐藤憲一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 240
3. 書名 救いと寛容の文学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----